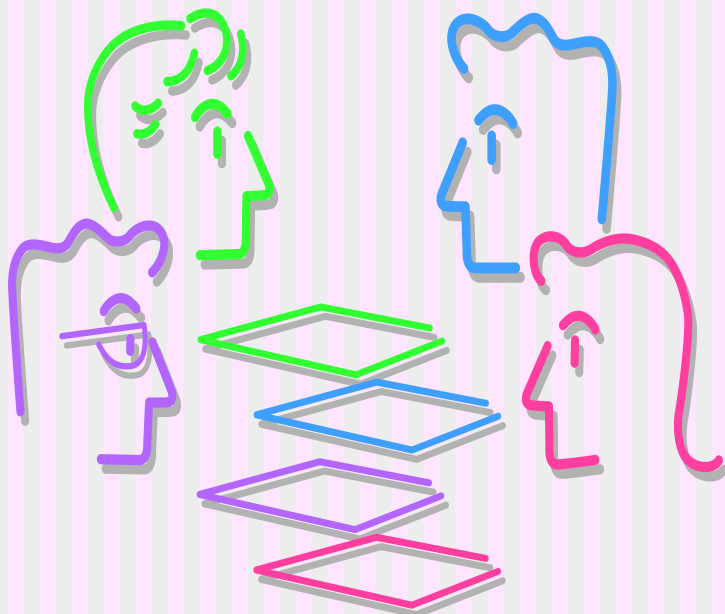


誤りの「修正しやすさ」:

教師にできること、できないこと



関西国際大学(非)

中西のりこ

1. 背景 (1)

■ 対象:

- 関西国際大学(主に2年生)
- 「英語科教育法」受講者14人
- TOEIC換算点 461.6点($SD=68.9$)

■ 方法:

- 3週間に一度Writing課題(4回/半期)
- A4用紙1枚、書式はテンプレートに従う
- Editing (P=文法的誤り/T=段落構成)
- Revision (翌週に提出)

1. 背景 (2)

■ 提出されたdraft writing:

- 総語数 11.254語
- 有効なwriting 49編
- 語数平均 230語 ($SD=55.9$)
- Readability平均 F-KGL6.63 ($SD=1.9$)
- 誤り指摘箇所平均 **(Peer) 19.0** ($SD=6.8$)
- 誤り指摘箇所平均 **(講師) 33.8**
($SD=15.9$)

(p.2-A参照)

2. 先行研究 (1)

- Truscott (1996, 1999)
 - Correctionの有効性を実証する事例が乏しい。
 - Correctionは学習者の意欲を奪う。
 - ∴ Correctionは有効でない+悪影響を及ぼす。
- Ferris (1999, 2004)
 - Treatment研究の対象、方法に一貫性がないため、意義を実証することは困難。
 - 学習者自身がフィードバックを求めている。
 - ∴ Treatmentは重要+必要。

2. 先行研究 (2)

- Truscott (2001) ⇒ “Correctability”
 - Simplicity
 - Discreteness
 - Salience
- Ferris (1999, 2002) ⇒ “Treatability”
 - A linguistic structure that occurs in a rule-governed way.
e.g.) VT, VF, SV, AD, NE, FR, RO

⇒ 一致: “Selective Feedback”

Editors do not recognize all the errors.

3. Writing の過程

行為者	誤りを認識	気づき、指摘に反応
① writer		O = mistake ≠ error × (しない) ⇒ p.2-B × (できない) ⇒ ②へ
② editor		O = feedback ⇒ ③へ × (しない) ⇒ p.3-C × (できない) ⇒ Case 1, 2
③ writer		O = correction × (しない) ⇒ p.2-B × (できない) ⇒ 先行研究

4. Case (1)

- Editor が誤りを認識してもFeedback を返せない。(p.3-D)

- Underline or circle the sentence and put a giant question mark.
- Offer several suggestions about how to rewrite the problematic part.
- Ask the student writer to rephrase the sentence orally during a one-to-one writing conference.

(Ferris 2002: 71-72)

4. Case (2)

- Editor が誤りを認識しないので Feedback を返せない。

⇒ The real 'untreatable errors' cannot be corrected (or even recognized).

- 言語知識に起因するもの

(p.3-E-1)

- 背景知識に起因するもの

(p.3-E-2)

- 文脈に依存するもの

(p.3-E-3)

5. 教師にできること、できないこと

■ 言語知識

- 「日本語の影響を受けたエラー」
日本人英語教師には理解できるので指摘せずじまいになる可能性が高い。

■ 背景知識

- トピックに関する知識
学習者の視点に立てば、“untreatable”が
“treatable”になることもある。

■ 文脈

- 文法的エラーばかり見ているは見逃しがち。